

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援・放課後等デイサービス ばれっとおもしろまち		
○保護者評価実施期間	令和8年2月1日		～ 令和8年2月28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	9	(回答者数) 9
○従業者評価実施期間	令和8年 2月 1日		～ 令和8年 2月28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 6
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年 3月 17日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	適切な支援の提供	<ul style="list-style-type: none"> 個別支援計画では、支援内容を「スモールステップ」で整理し、「いつ・だれが・何を行うか」を明確に設定することで、支援に関わる職員が日々の支援に取り入れやすい形にすることを大切にしている。 毎朝の職員会議では、前日の支援の振り返りに加え、児童のコンディションや学校・家庭での様子なども共有し、その日の支援方針を統一している。 職員の知識や技術の向上のため、事業所内外の研修に積極的に参加し、支援の質の向上に努めている。 	<ul style="list-style-type: none"> 職員同士が課題を気軽に相談し合い、問題解決に向けて自発的に取り組める関係づくりを進めていく。 職員が療育について学び続ける意欲を高められるよう、個々の目標設定と、その達成を支えるフォロー体制を整えていく。 資格取得に向けて、事業所として必要なサポートを行える体制を構築していく。
2	保護者や関係機関との連携	<ul style="list-style-type: none"> 送迎時は限られた時間ではあるが、保護者の様子や状況を丁寧にくみ取り、必要に応じてその場で相談対応や後日の面談調整を行い、課題を先延ばしにしないよう努めている。 「療育参観」「親子レクリエーション」「おもしろカフェ」など、保護者同士が気軽に交流し、相談し合える関係づくりにつながる機会を積極的に設けている。 事業所での子どもの様子や保護者とのやり取りの中で、今後の支援に関わる情報が得られた場合は、相談支援専門員など関係機関の担当者へ速やかに共有し、連携を図っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 子育てに不安や課題を抱える現役の保護者に対し、すでに学童期・青年期を経験した先輩保護者から助言を得られる機会をつくり、より幅広い視点で子育てを支えられる環境づくりに取り組む。
3	安心・安全な場の提供	<ul style="list-style-type: none"> 非常時の対応については、各種マニュアルを整備し、年2回以上の訓練と振り返りを行い、必要に応じて改善を重ねている。 まだ言葉で十分に表現できない幼児期の利用児に対しては、課題支援以前に「安心」と「安全」を感じられる場であることを大前提とし、その基盤づくりを大切にしている。 子どもの権利擁護や虐待防止に関する研修を定期的実施し、全職員の意識向上と支援の質の維持・向上に努めている。 	<ul style="list-style-type: none"> 安全計画については、保護者への共有が十分でない場面もあったため、今後は実施後の報告を確実にを行い、情報共有の徹底を図る。 職場環境が子どもへの関わりに影響することを踏まえ、職員がゆとりをもって支援にあたれるよう、働きやすい職場環境の整備に取り組む。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	<ul style="list-style-type: none"> 地域特性として、住民同士の交流が生まれにくい環境がある。 地域住民が事業所や子どもたちと接点を持つ機会が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 商業施設が多く、県外からの移住者も多い地域であるため、もともと地域コミュニティが希薄で、住民同士のつながりが生まれにくい。 その結果、住民が孤立しやすく、事業所としても地域に開かれた運営が進みにくい状況が課題となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 戸外活動や地域施設を活用した活動を積極的に行い、地域住民が子どもたちを「地域の子ども」として見守り、関わる機会を増やしていく。 ホームページやSNSを活用し、事業所の取り組みや子どもたちの様子を発信することで、地域住民にとって身近に感じられる存在となるよう努める。 実習生や学生ボランティアを積極的に受け入れ、インクルージョンの視点を持つ未来の社会人を育てる取り組みを進めていく。
2	<ul style="list-style-type: none"> 施設環境の制約により、現状では完全なバリアフリー化が難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 建物構造やスペースの制約により、設備面での改善に限界がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 設備面でのバリアフリー化が難しい部分については、「人による介助や見守り」を重点的に行い、利用者が安心して安全に過ごせる環境づくりを進める。 手すりや補助台などの用具を適切に活用し、子どもがより「安全」「安心」を感じられる環境を整備していく。
3	<ul style="list-style-type: none"> 現在の利用者の多くは、すでに地域のこども園・保育所に所属できているため、未就園児との交流機会が限定的である。 	<ul style="list-style-type: none"> 現在の利用者の多くは、すでに地域のこども園、保育所に所属できている。 未就園児の保護者が「就園への不安」を抱えている場合があり、受け入れ側の環境整備も含め、関係機関との調整が必要となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 未就園のお子さまについては、保護者の不安や受け入れ側の課題を丁寧に共有しながら、保護者や関係機関と連携して解決に向けて取り組んでいく。